

# 観光としての海外ボランティア

桑田恵理華

## 目次

はじめに

### I. 観光の定義

### II. 観光形態の変化

1. 世界における変容
2. 日本における変容
3. エリック・コーエンによる観光体験の分類

### III. 日本の若者の観光形態の変化

1. 日本の若者の旅の歴史
2. 「交流」という新たなキーワード

### IV. 海外ボランティア

1. 海外ボランティアとは
2. 若者の自分探し論
3. 語る場の提供
4. 観光庁も注目する「社会貢献活動を通じた旅行」

### V. 海外ボランティアの事例

1. 「僕たちは世界を変えることが出来ない」の映画化
2. 実際にカンボジアへの渡航を通して
3. これからの海外ボランティアのあり方

おわりに

参考文献

はじめに

大学に入ってから、「海外ボランティア」という言葉を聞く機会が圧倒的に増えた。夏休みなどの長期休暇を利用したり、一年間以上休学したりして海外ボランティアに大学生が出かけるケースは今や珍しくない。旅行情報を提供するダイヤモンド・ビッグ社の「地球の歩き方」が企画するボランティアツアーは10周年を迎え、参加者は2万人を超えている<sup>1</sup>。大学生や若者を対象とするこのタイプの旅行形態は年々増えている。貧しい人々の為に一生を捧げノーベル平和賞を受賞したマザーテレサについてインターネットで調べてみると、すぐにマザーテレサの家でのボランティアプログラムが表示されるほど、海外でのボランティアは身近なものになっている。

3.11での東日本大震災が発生した際、多くの若者が震災復興のボランティアに関わりを持った。Youth for 3.11という学生団体はその一例である。「2011年3月11日に立ちあがった学生による復興支援を行う日本最大の団体<sup>2</sup>」として、2012年12月9日現在、12,079人も若者を震災による被災を受けた現地へ派遣している。日本において「ボランティア」という言葉が普及するきっかけとなったのが1995年に発生した阪神淡路大震災だと言われている<sup>3</sup>。決してボランティア大国とは言えない日本において、日本人の若者の内向き志向が叫ばれる現代において、海外とボランティアが合わさった海外ボランティアが若者の間で注目を集め始めていることに筆者は強い関心を抱いた。

この論文では、観光の新しい形態としての「海外ボランティア」に着目したい。国内外における旅行形態の変化にふれながら、観光にまつわる理論を交えてその変化を考察し、最後になぜ海外ボランティアが大学生に受け入れられているのかについて言及したい。そして、現代の若者が海外ボランティアにひかれる背景にどんな社会的背景があるのかについて解明しながら、今後の観光形態のあり方について述べていきたい。

## I. 観光形態の変化

観光の語源は、中国の儒教の古典とされる四書五経の一つである『易経』の中に記されている「観国之光」だと言われている。「観国之光」とは、訪れた国の中に光を観ることを意味している。観光政策協議会においては「余暇時間の中で、日常生活圏を離れて行う様々な活であって、触れ合い、学び、遊ぶということを目的とするもの<sup>4</sup>」と定義されている。これらの定義から「観光」は非常に範囲が広範に渡り、定義が狭くないことで時代の変遷とともに変化していくものだということが示唆できる。

また、観光には3つの立場が存在する。観光には3つの立場が存在する。観光を消費する「観光客」、観光を制作する旅行会社や宿泊施設などの「プロデューサー」、そして観光が実際に行われる現地に住む「地域住民」である。次頁の図1が3つの立場を表したもの

<sup>1</sup> Travel Vision. 地球の歩き方、ボランティアツアーで2万人超一トヨタとコラボで新ツアーも。  
<http://www.travelvision.jp/news/detail.php?id=55791>. (2012年12月7日参照)

<sup>2</sup> Youth for 3.11. Youth for 3.11とは。<http://www.youthfor311.com/youth-for-3-11とは/>. (2012年12月16日参照)

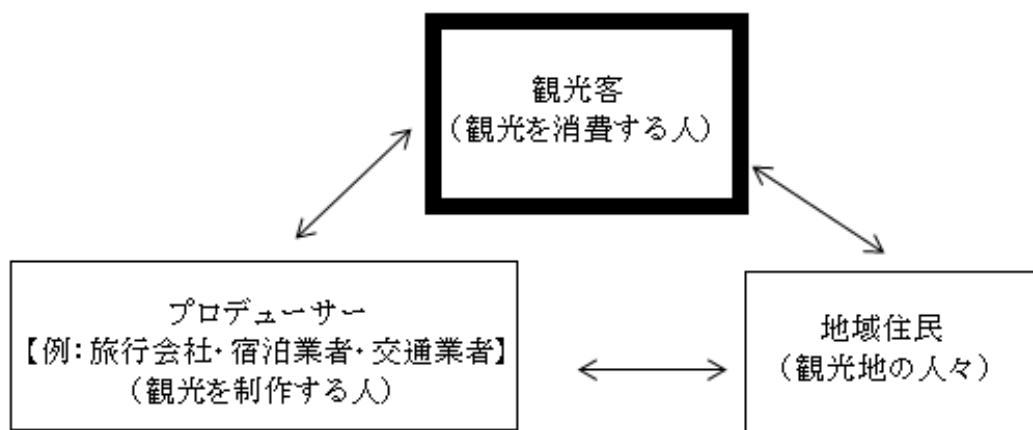
<sup>3</sup> 岡本栄一、2006、『学生のためのボランティア論』、大阪：大阪ボランティア協会出版部

<sup>4</sup> 国土交通省. 今後の観光政策の基本的な方向について（答申第39号）。

<http://www.mlit.go.jp/singikai/unyusingikai/kankosin/kankosin39.html>. (2012年11月11日参照)

である。この論文では、「観光客」に焦点を当てた考察を行っていききたい。

図1：観光の3つの立場



## II. 観光形態の変化

近代以前、観光はエリートのみが享受できる特定の領域とし扱われていた。近代後になると、観光として出向いた場所自体がステータスの一部となり、現代ではどんな目的で観光に行ったのかがステータスの一部とされている<sup>5</sup>。このように時代背景や社会によって観光の位置づけは大きく変わる。また、アンソニー・ギデンスは『近代とはいかなる時代か』の中で、伝統社会では人々がローカルな状況に埋め込まれていたのに対し、近代社会の人びとはローカルな状況から引き離される「脱埋め込み化」社会の中で生きていると述べている。そして、近代を多くの人々が国境をまたいで自由に旅行出来るようになった「移動」によって特徴づけられる「旅する社会 (Touring Society)」と呼ぶにふさわしい社会だとしている。この章では、「旅する社会 (Touring Society)」として特徴づけられる近代社会の観光形態の変化についてふれたい。

### 1. 世界の流れ

まず、世界で初めて団体旅行を提供したトーマス・クックについて簡潔に触れたい。イギリス人のプロテスタントの布教師であった彼は、1841年に禁酒啓蒙活動の一環として世界で初めてパッケージツアーを企画した。これは近代ツーリズムの誕生であり、のちに世界で初めての旅行代理店となるトーマス・クック・グループの創設につながる。旅行代理店は鉄道を利用することで都市の労働者に飲酒に代わる安価な楽しみを提供したい<sup>6</sup>禁酒運動という社会的目的から派生して生まれた。そして、「強烈な楽しみの期待<sup>7</sup>」を実現する観

<sup>5</sup> ジョン アーリ・加太宏邦訳、1995、『観光のまなざし：現代社会におけるレジャーと旅行』、東京：法政大学出版局、28頁

<sup>6</sup>本城靖、1996、『トーマス・クックの旅：近代ツーリズムの誕生』、東京：講談社、12頁

<sup>7</sup> ジョン アーリ・加太宏邦訳、前掲書、5頁

光の形を実現させた。人間が持つ消費の本質的な動機は物質的なものでなく、イマジネーションの中で体験済みの楽しい経験を「現実の中」で体験したいと思う<sup>8</sup>潜在的な欲望を満たすことに成功したのだ。禁酒運動の大会に信徒を多数送り込むためにチケットを出来るだけ安く一括手配する目的で、鉄道会社を訪れパッケージツアーを企画され、エリート層に限定された娯楽だった観光に大衆も参加するようになり、第二次世界大戦以降、米国や西欧を中心にマストゥリズムが誕生した。

しかしながら、誰もが旅行を比較的安価で気軽に楽しめるようになったことで、観光先の地域の自然、文化、生活が破壊され、地域住民も生活を他人にのぞき見されることに不快感や抵抗感を強めるようになる。そこで、マストゥリズムに代わるオルタナティブ・ツーリズムが1980年以降見られ始める。具体的には、1987年に環境と開発に関する世界委員会が「われわれの共通の未来(Our Common Future)」の中で「持続可能な開発」という言葉を取り上げ、「将来の世代の欲求を満たしつつ、現代の世代の欲求も満たせるような開発<sup>9</sup>が着目されるようになった。持続可能性の面で特に2つの理念が提唱された。一つ目は、環境と開発を共存させる「持続可能性」を重要視し、地域の自然環境が保全されてこそ、次世代の世代までの開発の持続性が担保されるものだとする理念である。二つ目は、地域住民と観光客の相互理解を重要視した「ソフト・ツーリズム」の提唱で、観光先の文化保全を尊重しながら、観光客のみならず、地域住民も交流を通して学びを得られる関係性の構築を目指すものである。海外ボランティアは二つ目の「ソフト・ツーリズム」の側面が強いと考えられる。

## 2. 日本の現代の観光形態の変容

日本では、1964年に海外旅行が解禁された。当時は、1961年に公開されたアメリカ映画「ブルー・ハワイ」の大ヒットをきっかけにハワイが常夏の楽園としてユートピアのイメージを構成し、非常に人気が高かったと言われている。そして、のんびりバケーションをするという習慣がなかった日本人に4泊6日でオアフ島観光とアラモアナ・ショッピングセンターの大型ショッピングモールで買い物を楽しむ旅行の仕方が定番のパッケージツアーとして定着化した。そんな中、誰もが体験できる「大きな物語」に基づく大量生産・大量消費型の観光形態から個人化した「小さな物語」に基づく多品種少量生産型のツーリズムへの移行が見られるようになる<sup>10</sup>。かつては、観光を需要する観光客側の欲望が単一で分かりやすかったことから観光を供給する旅行会社などのプロデューサー側の主導権が強かった。しかし、需要側の欲求は多様化を辿り、不明確で分かりにくくなったことで、供給側の主導権が弱まりつつある観光の形への変容がうかがえる。

その変容のきっかけとして考えられるのが、80年代前半に見られた旅行業登録の規制緩和による、HISなどの旅行代理店の格安航空券販売の実現である。円高を利用し、海外で航空券を仕入れるというかつてはバック・パッカーなどの個人がひそかに行ってきたことに企業が参入してきたことで観光の形態が大きく変わった。この頃から旅行代理店は航空券と宿泊地の手配のみにとどまり、観光地での過ごし方は個人に任せる「スケルトンツア

<sup>8</sup> ジョン アーリ・加太宏邦訳、前掲書、23頁

<sup>9</sup> 遠藤英樹、2007、『ガイドブック的！観光社会学の歩き方』、神奈川：春風社、195頁

<sup>10</sup> 須藤広・遠藤英樹、2005、『観光社会学』、東京：明石書店、121頁

一」を多く提供するようになる。かつての大衆観光客から自立した個人旅行者に対象は変わった。旅行代理店では、バック・パッカーの経験を持つ社員が学生を中心にした若者に個人旅行のアドバイスを送る場面が多く見られたという<sup>11</sup>。80年代後半からスケルトンツアーの低価格化は加速し、90年代には旅行代理店業界はシェア獲得のための安売り競争に飲み込まれていく。そして、経費を抑えるためにスケルトンツアーも主流になり始め、旅行スタイルも多様化していった。

### 3. エリック・コーエンによる観光体験の分類

ここで、エリック・コーエンによる観光体験の分類を参考に世界や日本の観光形態の変容について考察したい。まず、彼の分類について軽く触れたい。コーエンは、観光客の特徴は一括りにすることはできないが、観光客が体験する観光体験には5つのモードがあり、2つのタイプに分かれていると提唱している。以下、遠藤英樹の『ガイドブック的！観光社会学の歩き方』を参考にした。図2は、それぞれの分類をグラフに簡略化したものである。

図2: エリック・コーエンの観光体験の分類

生き方に触れる部分が遠い観光体験	生き方に触れる部分が近い観光体験
気晴らしモード レクリエーション・モード	経験モード 体験モード 実存モード

一つ目のタイプは、観光客自身の生き方や価値観の根幹に触れる部分が遠い観光体験である。このタイプには、気晴らしモードとレクリエーション・モードの2つのモードが存在する。気晴らしモードでは、日常の退屈から逃れる気晴らしや憂さ晴らしを求める部分が多い。ハワイやグアムなどの常夏の島での非日常を満喫する観光は気晴らしモードにあたりと考えられる。レクリエーション・モードでは、娯楽的な色彩が強く、観光を通して人々は心身を癒し、元気を取り戻す「再生 (re-creation)」の働きに大きな期待を寄せている。

二つ目のタイプでは、ツーリスト自身の生き方や価値観の根幹に触れる部分が近い観光体験である。その中には、経験モード、体験モード、実存モードの3つのモードが存在する。経験モードでは、観光先の現地の人々の生活様式や価値観に肯定的にとらえ、そこそが本当に人間らしい生き方だという考えに至る観光である。2011年に、GNH(世界国民幸福度)を提唱した国として一躍有名になったブータンがこのモードに分類されると考えられる。メディアでの露出が増え、世界一幸せの国に一度訪れたいという問い合わせが当時急増した<sup>12</sup>。体験モードでは、現地の人々の生活に憧れるだけにとどまらず、実際にそこに参加し、自ら体験しようとする観光であり、海外ボランティアもこのモードに分類される

<sup>11</sup>須藤広・遠藤英樹、前掲書、136頁

<sup>12</sup> Sponichi Annex. ブータンに行ってみよう！国王夫妻来日で問い合わせ急増！.  
<http://www.sponichi.co.jp/society/news/2011/11/22/kiji/K20111122002081880.html>. (2012年11月12日参照)

と考えられる。実存モードでは、現地の人々の生活を体験するだけにとどまらず、その生活様式や価値観に自身の身を置こうとするモードで、その場で暮らし続けるケースが挙げられる。

これらの分類と世界と日本の観光形態の変容を当てはめてみると、かつては生き方に触れる部分が遠い観光体験が主流であったのが、少しずつ生き方に触れる部分が近い観光体験が増えつつあることが示唆できる。トーマス・クックが手掛けた禁酒啓蒙活動としてのパッケージツアーは、飲酒に代わる活動として観光に着目したレクリエーション・モードに分類されると考えられる。また、日本におけるハワイ人気は気晴らしモードに分類され、常夏の島での日常とかけ離れた日々は人々に新鮮だったと考えられる。そして、世界におけるマストゥリズムからオルタナティブ・ツーリズムへの移行は経験モードや体験モードへの移行だともとらえられる。観光客向けの娯楽にとどまらず、地域住民にとっても娯乐的要素がある観光が受け入れられ始めている。また、日本における個人化した「小さな物語」に基づく多品種少量生産型のツーリズムへの移行も人々がかつての娯乐的な観光から新たな楽しみを見出せる観光を求めていることをうかがえる。そして、その楽しみを与えられるモードが海外ボランティアを含む生き方に触れる部分が近い観光経験なのではないだろうか。次の章では、日本の若者の観光形態の変化に言及し、その変化について考察したい。

### Ⅲ. 日本の若者の観光形態の変化

#### 1. 日本の若者の旅の歴史

前章で取り上げた観光形態の変容の中で特に着目したいのがマストゥリズムでは満足できなくなった若者の存在である。マストゥリズムから抜け出した新たな観光形態の形として、「カニ族」と「アンノン族」が呼ばれる人々が誕生する。日本のバックパッカーの起源といわれる「カニ族」とは1960年後半に大きなリュックを背負いながら、ヒッチハイクや鉄道を通して貧乏旅行をした若者のことである。リュック横に広がりすぎて列車の乗降の際にカニのように横歩きしなければならなかった様子から「カニ族」と呼ばれるようになった<sup>13</sup>。「アンノン族」とは、雑誌『anan』や『nonno』での旅行特集をガイドブック代わりに日本全国に現れた20代、30代の若い女性のことである。1970年に電通が国鉄が「ディスカバリー・ジャパン」というキャンペーンを始め、『「日本を発見し、自分自身を発見する」「ディスカバリー・マイセルフ」<sup>14</sup>』という斬新なコンセプトを掲げた。『電通の藤岡は「近代」が曲がり角に差し掛かり「もの」よりも「思い出」が重視される時代になることを見抜いていた<sup>15</sup>』と著者の古市が言及しているように、この頃から見物者として娯楽を楽しむ目的から自分探しの面への移行が垣間見られる。実際に、「カニ族」や「アンノン族」が見られるようになった1960年代から70年代における日本は高度経済成長期の全盛期であり、近代から現代の過渡期であったことから若者は「現代的不幸」と呼ばれる「閉塞感」「空虚感」「リアリティの欠如」に総括される「生きづらさ」を若者は感じていたと小熊英

<sup>13</sup>古市憲寿、2010、『希望難民ご一行様：ピースボートと「承認の共同体」幻想』、東京：光文社、58頁

<sup>14</sup>古市憲寿、前掲書、59頁

<sup>15</sup>古市憲寿、前掲書、59頁

二は指摘する<sup>16</sup>。そんな彼らの存在は、「自分探しの旅」の根源だと古市は分析している。「カニ族」は北海道などへの貧乏旅行をする中で「生きている実感」を求め、「アンノン族」は京都などの古都を訪れることで、「自分自身」を見つけようとしていた<sup>17</sup>。

そんな彼らが海外も旅先と視野に入れるきっかけになったのが前章でも触れた旅行代理店による格安航空券の登場である。海外での旅も身近になった若者にとって旅の形態は再び形を変える。1980年代にバブル期を迎えると消費文化に後押しされ、「アンノン族」にとっても旅とは食やファッションや買い物を楽しむ消費が強まった娯楽の形へと変わる。また、「カニ族」は「商品化される『冒険』」（ご一行様 66 ページ）とも比喻されるバック・パッカーのために用意された観光システムの中に取り組み込まれていった。例えば、ベトナムではバック・パッカーに人気の街では、彼らを利用対象としているバスのネットワークが形成されたり、ゲストハウスの近くでは彼らを顧客対象とした客引きの人たちが待ち構えていたりと完全に自由に独立した観光の形態からは離れていった。

そんな中、2007年頃になると若者の「旅離れ」という話を取りざたされるようになる。日本人全体の出国数が増加している反面、20代の若者の出国者数が減少傾向をたどっているのである。1996年には463万人いた出国者が2006年には298万人まで減少している。この間に若者人口は19.9%現象していたことを考慮しても減少傾向であることが顕著である<sup>18</sup>。その背景としてインターネットの存在とバーチャルな世界への人気が一因として考えられる。海外旅行が格安ツアーの普及により決して珍しいものではなくなった上に、インターネットを通して国内にいながら海外の情報を享受できるようになったことで、国内と海外の違いが小さくなり、理由なく遠くへ行く憧れが減少してしまったことが挙げられる<sup>19</sup>。例えば、現地の様子を知りたいときには無料動画サイトのユーチューブを開けば最新の状況を映像を通して見ることができ、国に関するニュースも時差なくすぐに届く。若者の旅離れのもう一つの要因として、手軽に楽しむ娯楽として携帯電話業界の成長に代表されるバーチャルな世界の人気が考えられる<sup>20</sup>。具体的には、携帯電話ゲーム、スマートフォン向けのアプリケーションソフトウェア、ソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)のツイッターやフェイスブックがその一例である。実際には、旅行に出かけても特に子供がゲームに夢中になり、日常生活と変わらない過ごし方を送り、旅の良さを実感しないまま帰るケースが増えていることを旅行会社ホワイト・ベアーファミリーの代表取締役の近藤は著書『なぜ、人は旅に出るのか』は指摘している。つまり、魅力的で明確な目的がない限り若者は旅に出かけなくなっている現状があるのである。

## 2. 「交流」という新たなキーワード

若者が明確な目的がなければ旅に出かけない現状がある中で、今後の観光の在り方として「交流」がキーワードだと近藤は提唱している。これは、前章で取り上げたコーエンの観光体験の分類の中での生き方に触れる部分が遠い気晴らしモードやレクリエーション・モードから生き方に触れる部分が近い経験モードや体験モードへの移行とも捉えられる。

<sup>16</sup>古市憲寿、前掲書、60頁

<sup>17</sup>古市憲寿、前掲書、60頁

<sup>18</sup>古市憲寿、前掲書、68頁

<sup>19</sup>古市憲寿、前掲書、69頁

<sup>20</sup>近藤康生、2011、『なぜ、人は旅に出るのか』、東京：ダイヤモンド社、68頁

観光客として現地住民や現地と距離を置いていた関係性から、現地の人達ともより身近な関係性を築くことで、インターネットの情報では提供できない感動を創りだすことが出来る。また、バーチャルな世界における仮想現実の世界観に浸っていた人々にとって、現実社会における人との交流は新鮮である。

また、若者の「既視感<sup>21</sup>」が若者の海外旅行離れの原因だと原田は指摘している。具体的には、「いわゆるデジャブのことで、経験したことがないのにどこかで経験したことがあるかのように錯覚してしまう現象<sup>22</sup>」だと定義している。インターネットの情報を通して、旅を疑似体験していることで、「既視感」は強まることで若者の行動範囲は狭まり、海外旅行よりも他の娯楽をたしなむ傾向が強い。その「既視感」を打開するうえで可視化することができない「交流」には大きな魅力が存在する。そして、海外という環境だけでは非日常とは言えず、「何か」がなければ「旅」は憧れとして機能しなくなっていると考えられる<sup>23</sup>。そんな「交流」も含まれる観光形態として「新・団体旅行<sup>24</sup>」が若者の間で注目を集めている。旅行代理店のヌーベルフロンティの代表取締役の望月は以下のように述べている。

「体験旅行」「交換旅行」「エクスチェンジプログラム」という名目で、短期語学研修や、現地の非政府組織（NGO）や非営利団体（NPO）への訪問、開発協力ボランティア、民族革命勢力との交流など様々プログラムが増えてきているという<sup>25</sup>。

このように若者は「新・団体旅行」という形の生き方に触れる部分が近い観光体験に対して魅力を感じている。次章では「新・団体旅行」の一例として、筆者にとって最も身近だった海外ボランティアを取り上げたい。

#### IV. 海外ボランティア

##### 1. 海外ボランティアとは

海外ボランティアとは、専門的な知識や経験を必要とせず、数週間から数か月の短期間海外でボランティアを行うプログラムである。旅行代理店として人気のH.I.S.では、ボランティア・スタディツアーを主とする社会貢献・国際協力する旅を提供している。具体的には、教育支援／社会福祉部門、地域開発／国際協力部門、自然環境部門、文化交流部門、スタディ・視察ビジネスツアー部門が用意されている<sup>26</sup>。また、NGOやNPOが主催し、社会問題の認識を目的としたスタディツアーを企画するケースも見られる。ここで、実際

---

<sup>21</sup>原田曜、2010、『近頃の若者はなぜダメなのか：携帯世代と「新村社会」』、東京：光文社、138頁

<sup>22</sup>原田曜、前掲書、138頁

<sup>23</sup>古市憲寿、前掲書、71頁

<sup>24</sup>古市憲寿、前掲書、70頁

<sup>25</sup>古市憲寿、前掲書、70頁

<sup>26</sup>H.I.S.ボランティア&スタディツアーデスク.H.I.S.すべてのボランティア・スタディツアー、社会貢献、国際協力する旅がここに集結！. <http://www.his-j.com/tyo/volunteer/>. (2012年11月30日参照)



に提供されているプログラムを一つ紹介したい。

「[NPO 法人かものはしプロジェクト]コミュニティファクトリー訪問付き カンボジア孤児院交流活動 6 日間<sup>27)</sup>」は、H.I.S.が提供しているプログラムの一つである。6 日間のスケジュールの中には、NGO かものはしプロジェクトへの訪問、地雷博物館への訪問、孤児院での交流活動（カンボジアの伝統舞踊アプサラダンスを一緒に踊ったり、施設内の清掃を手伝ったり、簡単な日本語を教えたり）、世界遺産のアンコールワット訪問、トンレサップ湖とオールドマーケットの散策など非常に充実した内容になっている。通常なら観光スポットを訪れることをメインとする観光形態では出会うことがない現地の人々との交流がこのプログラムでは可能になるのである。「一人参加 90%以上 新しい仲間ができる」「特別な技術不要 語学が苦手でも大丈夫」「毎日が発見の連続 夢や目標が見つかる」などホームページ上には若者にとっての敷居を可能な限り低くしていることが見えるフレーズが並んでいる。専門知識を求めず、短期間の活動である手軽さから多くの学生から支持を得ている。また、航空券や宿泊先や日本語が話せる現地スタッフの手配など個人で行うには煩わしい手続きをしないで済んでしまう。そして、「簡単、楽しい、感動的<sup>28)</sup>」な新しい旅のスタイルとして観光のみにとどまらず交流もできるのである。H.I.S.によると 85.7%の参加者が一人で参加し、18 歳から 22 歳が主要な顧客年齢である。初めて会った人達と共に日本人同士で、外国にいながらも日本語でのコミュニケーションができる環境が整っている新しい団体旅行の形が「新・団体旅行」なのである。

では、なぜ、若者の海外旅行離れが叫ばれていたのにもかかわらず、海外ボランティアは旅行代理店が商品化するほど需要が高いのだろうか。最後に若者の海外ボランティアに惹かれる背景として若者の自分探し論と結び付けたい。

## 2. 若者の自分探し論

まず、若者の自分探し論が生まれた社会的背景について言及したい。江戸時代までの前近代では生まれた家庭環境や身分によって一生が決まってしまう。だが、明治時代以降の近代から身分にかかわらず自由を手に入れた人々は自分の努力次第で夢を見ることができるようになり、完全雇用が保障され、経済成長も著しい黄金の時代であった。しかし、1970 年代からは『「大きな物語の終焉」「後期近代」「ポストモダン」「リキッド・モダニティ」「成熟社会」<sup>29)</sup>』と様々な言葉で集約される「ある変化」が起きる。

それは、1973 年にオイルショックが起こり、戦前なら「富国強兵」、戦後なら「経済成長」という誰もが共に一つの目標に向けて夢を追う「大きな物語」の共有ができなくなってしまったことである。社会全体が豊かになった時代に突入し、より多様化した消費者のニーズに応えるために、単純作業による大量生産の体制から企業は、商品に付加価値を加えられる自力で考えられる人材で形成された低コスト生産体制を目指すようになった。また、計算能力や知識量の多さが個人の能力として肯定的に見られた学歴社会から、ペーパーテ

<sup>27)</sup>H.I.S. ボランティア & スタディツアーデスク. [NPO 法人かものはしプロジェクト]コミュニティファクトリー訪問付き カンボジア孤児院交流活動 6 日間. <http://www.his-j.com/tyo/volunteer/jindo/rep6.html#SCHEDULE>. (2012 年 12 月 5 日参照)

<sup>28)</sup>『地球の歩き方』編集室/編集、2008 年、『1 週間からできる海外ボランティアの旅』、12 頁

<sup>29)</sup>古市憲寿、前掲書、28 頁

ストでは必ずしも測れないその個人の持つ「人間力」と呼ばれるコミュニケーション能力やネットワーク形成力が評価される社会への移行が見られるようになる。このように社会共通の「大きな物語」がなくなり、会社がいつ倒産するか分からないからこそ会社員という一般的な選択肢の他にも検討する余地が生まれる時代の中、人々は「存在論的不安<sup>30</sup>」を抱くようになる。かつては、社会が与えてくれた物語を自分で創り出す必要があり、一生安心できる環境の面で足場はなくなってしまった。そんな中でアイデンティティの危機に苛まれる人がこの「存在論的不安」に苦しむという。ここに若者の自分探し論の原点があると考えられる。

そして、1994年には「就職氷河期」という言葉が流行語大賞になり、若者の雇用状況の悪化は現代でも続いている。現代の就職活動においても「自己分析」としてかつての自分自身の性格について振り返る機会が生まれることでより自己のアイデンティティを意識する機会が増えている。

『「生きづらさ」について』で萱野は、他者からの承認されることによって人々は自分に価値を見出すことに言及している。つまり、他人から承認されることによって「存在論的不安」が解消できるという見方である。そして、承認されたいがために周りに過剰に同調するコミュニケーションのあり方が特に若者の間で主流になってしまったことに危機感を募らせている。海外ボランティアの特性を見てみると、無償の行いから感謝される経験が圧倒的に多い。例えば、孤児院にいる子供はかつて家族を失い悲しみにくっていた中で、孤児院に海外ボランティアで渡航した若者が訪問することで、自分の置かれた立場を理解した人達と共に楽しい時間を過ごせるようになるのである。子供にとっても、「存在論的不安」を抱えていた若者にとってもお互いの必要性を感じる事がお互いにとって肯定的に働く。また、海外ボランティアは海外で行われることで、萱野が懸念していた周りに過剰に同調するコミュニケーションは生まれにくい。その代わりに、異なる価値観を受け入れることに寛容になることで、自分の価値観に固執するのではなく、相手のためという立ち位置がもたらす柔軟性が生まれる。

つまり、海外ボランティアという観光形態は以前の娯楽的な側面が強かった観光よりも自己のアイデンティティと向き合う内省的な側面が強いことが読み取れる。海外ボランティアは、マスツーリズムから抜け出した「カニ族」や「アンノン族」が求めていた「自分探しの旅」の現代の在り方なのではないだろうか。

### 3. 語る場所の提供

また、現代の若者が求める人との繋がりについてある大学生の非常に印象的な記述があったので、ここで紹介したい。

「たとえば屋久島で四〇人が集まって飲み会を行った時など、皆、見知らぬ同士でもボロボロと本音が出るのです。それまで言えなかったことが切り出せる。ただし、そこに十分な信頼関係があるというわけではありません。むしろ、見知らぬもの同士だ

---

<sup>30</sup>古市憲寿、前掲書、32頁

から語り合える。その関係に継続性はなくて、羽田で解散したらもう他人に戻ってしまう<sup>31</sup>。

この言葉から現代の若者は、人との交流の中に、長年に続く人間関係を形成する場としてではなく、あくまでも自分の価値観を他人に聞いてもらったり、新しい価値観を取り入れたりする「自分探し」の働きを求めていることがわかる。たしかに、海外ボランティア先では、さきほどの紹介したカンボジアのプログラムでは孤児院での滞在は 2 日間にとどまり、参加者同士も初めて会ってから 9 日後にはもう二度と会わない可能性のほうが高い。また、萱野が危惧していた周りに過剰に同調するコミュニケーションを求められない場であることが海外ボランティアを訪れる若者が多い要因なのではないかともとらえられる。

観光体験の分類を行ったコーエンは、観光体験は、旅行しているときからずっと「存在しているもの」ではなく、「語り」を通して『「構成されるもの」、「紡がれるもの」<sup>32</sup>』であることを強調している。つまり、観光体験を他人に話したり、自分自身との対話として日記に記したり、出版物として発行したりして、「語る」ことで観光での出来事や抱いた思いが観光客自身の中に意味を見出されたときに初めて観光体験として成立するのである。自分探しを行う上で「語る」場がある海外ボランティアは若者にとって魅力的にうつるのである。

#### 4. 観光庁も注目する「社会貢献活動を通じた旅行」

観光庁の「新・団体旅行」の形態が若者の旅行促進に期待できることを示した見解をここで紹介したい。2010年に若者の旅行復興を目的として、観光庁より民間企業や大学関係者、行政・観光関係団体の関係者で構成されている若者旅行振興研究会が発足した。2011年6月に行われた第4回の研究会の最終報告において、3つのキーワードが提示された<sup>33</sup>。この最終報告では、インターネットを中心媒体とした旅行業者のダイヤモンド・ビッグ社、楽天トラベル、じゃらんリサーチセンターの4社の報告を中心としている。3つのキーワードとして、「社会貢献活動を通じた旅行」「キャラクターツーリズム」「平日・閑散期の需要促進商品」が挙げられている。これらの中でも特に注目したいのが「社会貢献活動を通じた旅行」である。ダイヤモンド・ビッグ社の副本部長の奥は若者が社会貢献活動に強く惹かれる要因として大きく2つあると指摘している。一つ目は、同じ目的を持った若者との出会いである。ボランティア活動に興味がありながら、同じような目的を持った若者に出会う機会が日常生活では少なく、ボランティアなどの社会貢献を目的とした旅行はそんな仲間との出会いを提供してくれるという。そして、二つ目は訪問先で「ありがとう」と感謝される機会が多いことから参加者の満足感が高まるという。この最終報告においての2つのポイントは、前節で取り上げた「語る場」を構成してくれる人々との出会いの場を提供してくれる上に、本章の2節で取り上げた「存在論的不安」を解消する感謝される経験

<sup>31</sup>近藤康生、前掲書、88頁

<sup>32</sup>遠藤英樹、前掲書、27頁

<sup>33</sup>明確すぎる目的が必要を生む、若者の行動意識シアプローチをー観光庁の研究会。  
<http://www.travelvision.jp/news/detail.php?id=49518>。(2012年12月8日参照)

も出来るという若者が海外ボランティアに求めることに合致していると捉えられる。

## V. 海外ボランティアの事例

この章では、海外ボランティアの実際の事例を紹介しながら、最後に今後の海外ボランティアのあり方について筆者の考えを述べたい。

### 1. 「僕たちは世界を変えることが出来ない」の映画化

2011年に公開された「僕たちは世界を変えることができない。But we wana build a school in Cambodia.」というタイトルの邦画を紹介したい。現役大学生の実話をもとにした映画で、カンボジアでの学校建設を目指す彼らの軌跡を追った作品である。2008年に自費出版された『僕たちは世界を変えることができない。』という作品が原作になっており、自費製作ながら5000部の売上を記録し、のちに”But we wana build a school in Cambodia”という一文も加えられたタイトルのもとで2010年に加筆されたものが出版された。

普通の医療大学生が150万円あればカンボジアには学校が建つことを知ったことですのでの物語は始まる。この映画の中では、カンボジアでの学校建設を目指す中で、貧困や地雷やHIVなどカンボジアが抱える社会的問題を目の当たりにし、言葉を失うシーンが何度も登場する。そして、学校建設を目指すも継続性が非常に難しく、学校を一校建てることでどの程度カンボジアのより良い生活に貢献できるのか疑問を感じる主人公達の姿が印象的である。この映画を通して、現在の海外ボランティアの課題を垣間見ることが出来る。「僕たちは世界を変えることが出来ない」という決してポジティブではないメインのタイトルと”But we wana build a school in Cambodia”というそれでもカンボジアに学校を建てたいという強い意志がうかがえるサブタイトルから、海外ボランティアにおける葛藤が伝わってくる。

手軽に取り組むことが出来ることで観光客側にとっては都合がいい海外ボランティアではあるが、その活動が継続的に行わなければ、相手国にとって迷惑になることさえもある。たとえば、テレビのチャリティー企画で途上国に建設された学校はその企画が終わると学校としての機能を失い、ただの建物へと廃れてしまったというケースが聞かれる。その他にもカンボジアでNPOの学校を運営している方の話で、一地域だけに学校を立ててしまい、特定の地区の子どもが優遇的に教育を受ける環境が生まれ、地域間で子供のいじめに発展するケースも実際に起きているという話を聞いたことがある。学校訪問をすることで、相手の子供たちと自分自身が交流することが目的となり、彼らにとってどんなプラスな影響を与えられるのか、相手側の視点が抜け落ちてしまうことがある。旅行代理店で組まれた学校訪問ではプログラムとして規定された内容が用意されていて参加者の行動範囲が狭まってしまう。

地域住民に影響が及ぼされるのにも関わらず、観光客側は一步その国を出てしまうと日常生活に戻ってしまう。観光客が再びその地に戻ってくることは必ずしも多いとは言い切れない。旅行だからこそ、一つの貴重な思い出として完結してしまい、時間が経つにつれて記憶は少しずつ薄れていく。入れ替わり訪れる海外の若者と交流をして、果たして当人の子供たちはどんな心境なのだろうか。かつてのマスツーリズムからオルタナティブ・ツ

ーリズムの移行の際、地域住民も生活を他人にのぞき見されることに不快感や抵抗感を強めたという背景があった。観光客が地域住民の生活にも興味を持った現象についてディーン・マッカネルは、観光客は日常生活から離れた別の「時」と別の「場」に本物を見出し、他人のリアルな生活に魅力を感じる<sup>34</sup>ためだと説明している。そのうえで、「ツーリスト専用のとっておきの装置、舞台、会場<sup>35</sup>」を旅行業者は用意し、現地の人々のリアルな生活に観光客が侵入する自己防衛としての観光が生まれると指摘している。この自己防衛のために生まれた一つの形として海外ボランティアの形態も考えられる。交流をしたり、彼らの背景について知ったりする機会が提供されながらも、彼らの個人的な背景について過度に介入されることはタブーとされている。その距離感が保たれているで、プログラムとして成立している。しかしながら、子ども達側の視点に立った時に、常に彼らのバックグラウンドを意識した上での接し方をされ続けることに彼らの成長過程の中で何かしらの影響が生まれないのだろうか。

## 2. 実際にカンボジアへの渡航を通して

2012年の11月に、筆者は紛争後の社会がどのように復興しているかをテーマにカンボジアに渡航するスタディツアーに参加した。その中で、地元の小学校で交流をするというプログラムが含まれていた。時間が非常に限られていたことから折り紙で折った鶴を子供たちに渡すだけで小学校での滞在時間は過ぎてしまった。その時、周囲を見渡した時にカメラで子供たちの笑顔を撮ろうと、交流よりも写真を撮ることに夢中な参加者が何人もいた。この光景を見たとき、海外ボランティアで現地の人々との交流は、彼らの地位の固定化につながってしまうのではないかという危機感を覚えた。「僕たちは世界を変えることができない。But we wana build a school in Cambodia.」の内容を紹介する際に公式ホームページには「“笑顔のチカラ”に心ふるえる物語<sup>36</sup>」という言葉が使われている。途上国にいる子ども達の笑顔がいわば途上国を訪れる際のコンテンツとして取り込まれてしまっているのである。また、トンレサップ湖での水上ツアーに参加した際にもコンテンツ化されてしまう途上国の子ども達に対して疑問を持つ瞬間があった。この水上ツアーでは、湖の上に浮かぶ船の小学校を案内された。小学校に到着すると、ツアーガイドはおもむろに生徒を数人が集め、「写真一緒に撮れるよ」と生徒と共に写真を撮る場を提供した。どんな姿で生徒が学んでいるかに関心があったのにもかかわらず、生徒との写真を撮ることを観光客は求めていることを現地の人たちは熟知していたのである。その場面に遭遇した時、全く知らない外国人の人達を喜ばせるために写真を撮る時に一時的に笑顔を見せる生徒たちの様子に違和感を覚えた。観光客が撮った写真の多くは、フェイスブックなどのホームページ上に子供たちの知らないところで写真は公開されている。悪気があるわけでは全くないが、友達同士でネットに写真を公開することに躊躇するのにもかかわらず、海外の子供たちの写真は本人のプライバシーを考慮せずに公開してしまう人々に筆者は違和感を覚える。もう二度と会うことはない関係だからこそ写真を撮って公開することも手軽になって

<sup>34</sup>遠藤英樹、前掲書、15頁

<sup>35</sup>遠藤英樹、前掲書、15頁

<sup>36</sup>僕たちは世界を変えることができない。But we wana build a school in Cambodia.  
<http://www.boku-seka.com/main.html>. (2012年12月5日参照)

しまっている現状がある。

### 3. バングラデシュで感じた違和感

筆者は、大学2年時に10日間、バングラデシュに海外ボランティアという目的で渡航した。学生と社会人を含む計30人の参加者と共に4つのグループにテーマに沿って分かれ、渡航前にテーマに関連して自分達がどんな貢献が出来るのか下調べをし、現地で調査をし、最終日に現地での問題点や改善について発表をするという内容であった。たったの10日間であったが、現地の大学生の通訳を交えて、現地の農村の人々に対してインタビューを行い、下調べとのギャップに直面しながらも発表を終えることが出来た。そして、帰国してから海外ボランティアやバングラデシュに興味がある人に向けて帰国発表会を行った。このボランティアに参加した際、現地の農村の人々に対してインタビューを行い、現地の人達が困っていることについて私達が手助けになるということで真摯に答えてくれた。しかしながら、問題点や改善点を発表することにとどまり、帰国発表会後に具体的に現地の改善に向けた行動は行われなかった。このプログラムでは、参加者の現地における柔軟性や問題解決能力の育成が渡航の目的とされていた。多くの参加者は、仮説を立てながら海外でその実情を目の当たりにし、その考察をふまえた新しい結論にチーム一丸となって考え抜くことに大きな達成感を感じ、筆者自身にとっても非常に貴重な体験となった。しかしながら、相手の状況を改善したいという思いを持って参加者は参加するものの、大きな変化はもたらせないまま一過性のイベントとして終わってしまった。一度の渡航で、部外者が突然その地域に入ってきて現状を劇的に変えることは不可能に近い。継続性の面で、旅行代理店が提供する海外ボランティアプログラムでは参加者は毎回異なりながらも継続性を持った活動が行われるという点では有意義だと感じる。国際機関やNGO・NPOの多くが資金獲得に頭を悩ませる中、旅行代理店は利益が生まれるビジネスサイクルが形成されれば、継続され続ける。

### 4. 今後の海外ボランティアのあり方

今後の海外ボランティアの在り方として、自省の役割を期待する「自分探しの旅」から一歩進化した観光形態がこれからさらに受け入れられるのではないかと感じる。途上国の子どもたちが旅の一つの見せ物としてのコンテンツではなく、異なる価値観や生まれ育った環境を持つ人間として受け止められる新しい形に発展するにはどんなことが必要なのだろうか。

前章でも取り上げた観光庁の若者旅行振興研究会において、ボランティアなど社会貢献を通じた旅行は確実にマーケットがあるとしながらも、「受入側自治体との情報交換や連携、ボランティアをまとめるリーダーの育成とノウハウ共有が課題<sup>37)</sup>」だと指摘している。現代はその第一歩を踏み出した段階なのではないかと筆者は考える。かつては、接点を持つことさえも難しかった海外の人々と現代では交流をし、お互いのことを深く知りあう機会が

---

<sup>37)</sup>Travel Vision. 明確すぎる目的が需要を生む、若者の行動意識しアプローチを一観光庁の研究会.  
<http://www.travelvision.jp/news/detail.php?id=49518>. (2012年12月8日参照)

生まれた。これから先、よりよい関係作りに向けた観光形態の変容が求められている。1章でふれた観光の語源である「観国之光」は、訪れた国の中に光を観ることを意味している。この国の中の光を見る上で、訪れた国に住む人々の中にも光を見出すことを現代の若者は求めているのではないだろうか。

おわりに

この論文では、観光形態の変容にふれながら現代の若者を中心とした層に広く受け入れられ始めた「新・団体旅行」について言及し、海外ボランティアをその一例として紹介した。かつては敷居が高いとされていた海外旅行も現代では、若者にとっても身近な存在になり、観光客と地域住民がより近い立場で交流できるプログラムが増えている。

これからは、観光客にとっても地域住民にとっても互いが成長出来る Win-Win の関係性が築くことが出来る観光形態への変容が期待される。観光客の自分探しとしてのツールや自分の能力を高めることだけが目的となる留学的な側面の強い海外ボランティアを続けていくと、やがては、地域住民との距離感も徐々に大きくなってしまいかねない。そして、相互理解どころか摩擦が大きくなってしまうことも起こりうる。大自然や世界遺産と異なり、感情を持った人間が関わりを持つ以上、創造力を働かせながら相手の立場を考慮することがより良い観光には必要不可欠である。そのためには、海外ボランティア先での相手のニーズに真摯に耳を傾け、参加者がしたいこと以上に、現地の人々がして欲しいことを優先的に配慮することが求められる。観光庁の若者旅行振興研究会の「受入側自治体との情報交換や連携、ボランティアをまとめるリーダーの育成とノウハウ共有が課題<sup>38</sup>」という指摘から見られるように、より現地の人々に寄り添うことが出来るかが重要だと考えられる。しかしながら、あくまでも旅行代理店は企業であり、顧客がいなければ継続的にツアーを続けることは出来ない。ボランティアに特化した組織でもなく、国際機関ではないからこそ観光客と地元住民との優先順位のバランスのとり方が非常に難しいとも言える。顧客として必要不可欠な観光客と観光を行うことを受け入れてくれる地域住民なしでは観光は成立しない。しかしながら、あまりにも参加者本位のプログラムに偏り過ぎると、地域住民側は壁を作り、その地域や地域住民の良さが失われてしまう環境がありうる。両者のニーズをくみ取ったそれぞれの代弁者の存在は旅行代理店には必要不可欠であり、旅行代理店が目指す立場の一つではないだろうか。そして、その姿勢が新たな海外ボランティアを大きく前進させるのではないかという大きな希望が持てる。

---

<sup>38</sup>Travel Vision. 明確すぎる目的が需要を生む、若者の行動意識しアプローチをー観光庁の研究会.  
<http://www.travelvision.jp/news/detail.php?id=49518>. (2012年12月8日参照)

## 参考文献

遠藤英樹、2007、『ガイドブック的！観光社会学の歩き方』、神奈川：春風社

岡本栄一、2006、『学生のためのボランティア論』、大阪：大阪ボランティア協会出版部

近藤康生、2011、『なぜ、人は旅に出るのか』、東京：ダイヤモンド社

ジョン アーリ・加太宏邦訳、1995、『観光のまなざし：現代社会におけるレジャーと旅行』、東京：法政大学出版局

須藤広・遠藤英樹、2005、『観光社会学』、東京：明石書店

『地球の歩き方』編集室／編集、2008年、『1週間からできる海外ボランティアの旅』

原田曜、2010、『近頃の若者はなぜダメなのか：携帯世代と「新村社会」』、東京：光文社

古市憲寿、2010、『希望難民ご一行様：ピースボートと「承認の共同体」幻想』、東京：光文社

本城靖、1996、『トーマス・クックの旅：近代ツーリズムの誕生』、東京：講談社

## 参考サイト

国土交通省. 今後の観光政策の基本的な方向について（答申第39号）.

<http://www.mlit.go.jp/singikai/unyusingikai/kankosin/kankosin39.html>. (2012年11月11日参照)

僕たちは世界を変えることができない。But we want to build a school in Cambodia.  
<http://www.boku-seka.com/main.html>. (2012年12月5日参照)

H.I.S.ボランティア&スタディツアーデスク. H.I.S.すべてのボランティア・スタディツアー、社会貢献、国際協力する旅がここに集結！. <http://www.his-j.com/tyo/volunteer/>. (2012年11月30日参照)

H.I.S.ボランティア&スタディツアーデスク. [NPO法人かものはしプロジェクト]コミュニティアクトリー訪問付き カンボジア孤児院交流活動6日間.  
<http://www.his-j.com/tyo/volunteer/jindo/rep6.html#SCHEDULE>. (2012年12月5日参照)

Sponichi Annex. ブータンに行ってみよう！国王夫妻来日で問い合わせ急増！.



<http://www.sponichi.co.jp/society/news/2011/11/22/kiji/K20111122002081880.html>. (2012年11月12日参照)

Travel Vision. 地球の歩き方、ボランティアツアーで2万人超ートヨタとコラボで新ツアーも. <http://www.travelvision.jp/news/detail.php?id=55791>. (2012年12月7日参照)

Travel Vision. 明確すぎる目的が需要を生む、若者の行動意識しアプローチを一観光庁の研究会. <http://www.travelvision.jp/news/detail.php?id=49518>. (2012年12月8日参照)

Youth for 3.11. Youth for 3.11 とは. <http://www.youthfor311.com/youth-for-3-11> とは/. (2012年12月16日参照)